

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 + 源氏解説

連載第 60 回 第 11.4.7.2 節～第 11.4.8.2 節

2020 年 6 月 15 日

小 田 勝

「11.4.7.2 並立を表す助詞」の 362 頁から。用例(16)～(18)の類例、

- ・日下部の 此方の山と 暈薦 平群の山 の (記歌謡 91)
- ・をかしき事を言ひてもいたく興ぜぬと、興なき事を言ひてもよく笑ふのにぞ、品のほど計られぬべき。(徒然 56)

用例(18)の類例、

- ・妹とわれ のねやの 風戸に昼寝して日高き夏のかげを 過ぎさむ (好忠集)

用例(21)(22)の類例をあげる。

- ・何となく花 や紅葉 のを見るほどに春と秋とはいくめぐりしつ (風雅 1856)
- ・日暮れにければ、その夜、人のもとに泊まりて、いま 一疋の布して、馬の草 や我が食ひ物 のなどにかへて、その夜は泊まりぬ。(古本説話集 58)
- ・讃岐の八島にかたのやうなる板屋の内裏 や御所 のをぞつくらせける。(平家 8・太宰府落)

用例(25)について、次例は準体言に付いた例である。

- ・残りの船は、風に恐るる か、梶原に怖づる かして、みなとどまりぬ。(平家 11・逆櫓)

同頁 1 つめの◆について、間投助詞にも、

- ・人々の、花 の、蝶 やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。(堤・虫めづる姫君)

のような句型がある。「何 よか よと」(和泉日記)は珍しい形であろう(寛元本は「何やかやと」)。「…と…と」の句型でも、次のような場合は、共同者を表す格助詞であって、並立助詞ではない。

- ・唐の玄宗皇帝 と楊貴妃 と双六をあそばされ候ひけるに (平治・金刀比羅本)

並立を表す「に」は第 12.4 節、380 頁用例(59)～(61)を参照。

363 頁「11.4.7.3 名詞の列挙」。次例は、時間的な道行き文ともいうべきものである。

- ・春霞山郭公もみぢ葉を雪も多く の年ぞ経にける (貫之集)

同頁「11.4.8.1 数量詞移動」。「3つのグラスを 2つ割る」のような句型では、数量詞遊離が部分量を表す。その古典語の例。

- ・この度は大集経四十卷を二十卷書き奉りて、松山に奉納し奉る。(とはずがたり)
 <後ノ文ニ「さて大集経今二十卷いまだ書き奉らぬを」トアル>

次例の「二人」は「二人で」の意である。このような数量詞は移動とは捉えられない。

- ・行くさ(=往路)には二人我が見しこの崎をひとり過ぐれば心悲しも(万450)
- ・我が背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪の嬉しからまし(万1658)

365頁第11.4.8.2節は、節名が「数詞の使用」となっているが、内容的には「助数詞の不使用」とすべきであった。用例(2)の類例をあげる。

- ・み谷二渡らす阿治志貴高日子根の神そ(記歌謡6)
- ・うつせみの世やも二行く(=二度トアロウカ)(万733)
- ・我が恋は千引きの石を七ばかり首に掛けむも神のまにまに(万743)
- ・瀬田の橋本の家にて、歌の題六(=六ツ)を出だして人々詠ませしに(大武高遠集・詞書)
- ・そのたび、公卿の家十六焼けたり。(方丈記)
- ・人の家に白い鶏を千飼ひつれば、その家に必ず後の出で来といふことのあればとて(平家・流布本・8・山門御幸)

この節のあとに、節を5つ(!)追加する。

11.4.8.2' 名詞の助数詞用法(新設)

名詞を助数詞として用いることがある(例えば、現代語で「部屋・グループ・車線・路線・袋」などは名詞と同形の助数詞である)。

- (1) 入日さず波路を見れば一雲居(=雲一ツ分)明石の浦は隔たりにけり(能因集)
- (2) 美しきものども、さまざまに装束き集まりて、二車ぞある。(蜻蛉)

11.4.8.2" 数詞の連体詞的使用(新設)

数詞は、連体詞的にも用いられる。

- (1) 法の水ひとつ流れ(=一ツノ流れ)を結びても心々に末ぞなりゆく(新後撰708)

節の新設は、次回に続く。

[前回(第59回)の「源氏解説 桐壺(4)」の訂正] 146頁9行目、「弟宮の→更衣腹で、しかも弟宮の」。147頁13行目、「おできになれず→おできにならず」。

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（5）

（増註版 11 頁、
新全集 22 頁）途方にくれずにはいらっしゃれない^①。（帝は）輦車の宣旨などをおっしゃっても、また（更衣の部屋に）お入りになって、（退出を）どうしてもお許しにならない^②。「死出の旅路にも、遅れたり先立ったりしないようにしよう（一緒に行こう）と約束なされたのだから^③、いくらなんでも私を捨てて、行くことはできないだろう」とおっしゃるのを、女もたいそうおいたわしいとお見申し上げて、

「これを最後として別れる死出の旅路が悲しいにつけても、行きたいのは旅路ではなく、生きたいのは命であった（と今気がついたよ）ほんとうに（前々から）このように（生きたいと）存じておりましたならば^④」と、息も絶え絶えになりながら、申し上げたようなことはありそうであるけれど、たいそう苦しそうでだるそうなので^⑤、（帝は）このまま、どうこうなるだろう最期をすっかり見届けなさろうとお思いになるが、「今日始めることになっている様々な御祈禱で、しかるべき僧たちがお引き受け申し

（注） ①原文「思し召し惑はる」の「る」は自発。 ②新全集のように「さらにえ許させ給はず」なら、「どうしても許すことがおできにならない」 ③原文「契らせ給ひけるを」。「けり」を体験していない過去とみる説には不都合な用例。 ④言いさしの言葉は、「もっと（主上や若宮のために）生きる努力をしてもみましたのに」くらいか（私の高校時代の古文の授業中に、恩師、故・立平幾三郎先生から示された解）。「おそばに参るのではございませんでしたのに」（玉上琢彌『源氏物語評釈』）、「なまじ帝のご寵愛をいただかなければよかつたろうに、の意か」（新全集）などは、あり得ないというべきである。 ⑤この女性は、「-げなり」の語形で形容されることが多い。

上げている御祈禱が^⑥、今宵から」と急がせ申し上げるので、（帝は）たまらなくお思いになりながら宮中から下がらせなされた。（帝は）お胸がぐつと塞がるばかりで、少しも眠れず、夜を明かしかねていらっしゃる。お見舞いのお使者が（更衣の里を）往復するのは僅かな時間なのに^⑦、（その間も）帝はやはり気がかりな気持ちを、際限なくおっしゃっていたが^⑧、（お使者が更衣の里に着くと、そこの人々が）「夜半を少し過ぎたところに、お亡くなりになってしまった」と言って泣き騒ぐので、お使者もたいそうがっかりして宮中に帰って御前に参上した。お聞きになる帝の御心の乱れといったら^⑨、何も分別がおつきにならず、（部屋に）籠もっていらっしゃる。（帝は）御子を、こうした母の喪中でもたいそう御覧になりたいけれど、このような喪中に宮中にお仕え申し上げなさるのは先例のないことなので、（御子は故母上の里に）下がりなさろうとする^⑩。（若宮は）何事があるのだろうかともお分かりにならず、お仕え申し上げている女房たちが泣き惑い、帝もお涙が絶えず流れていらっしゃるのを、変だとお見申し上げていらっしゃるのだが^⑪、

（注）⑥構文的には助詞「の」の無い同格構文（『総覧』343頁）。もちろん名詞句を細切れに提示して、急いでいる口吻を表したものともみられる。⑦「御使ひの行き交ふ〔ノハ〕程もなきに」⑧「いぶせさをかぎりなくのたまはせつるを＝限りなくいぶせしとのたまはせつるを」⑨原文「聞こしめす御心まどひ」は、どのような成分として、どこに係るか未勘。『総覧』714頁参照。仮に「瘦せ給へること、いとほしげにさらぼひて」（未摘花）のような、提示的な名詞句とみる。⑩原文「まかで給ひなむとす」。前に「まかでなむとし給ふを」とあった。『総覧』556頁参照。⑪若宮が「あやしと見」たのは「候ふ人々」と「うへ」の両方なのだが、帝を含むので「奉る」を用いた。河内本は「見奉り給へり」と、ここで文が切れる。